

中国の石器-中国科学院,中国社会科学院寄贈の複製標本について-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2009-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安蒜, 政雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/6043

中国の石器

—中国科学院・中国社会科学院寄贈の複製標本について—

安 蒜 政 雄

一 はじめに

一九八〇年秋、中国から二人の考古学者が明治大学を訪ずれた。一九八〇年は、明治大学に考古学研究室がおかれ、丁度三〇年目にあたり、また大学の創立百周年でもあった。考古学研究室ではこの年に、その創設を記念して、中国から考古学者を招く企画をたてていた。この計画は、中国社会科学院考古研究所の所長である夏鼐先生の尽力をえるなか、杉原莊介教授と安蒜政雄の二人が北京を訪ね具体的な打ち合わせをおこなって、実現するはこびとなった。こうして、中国科学院古脊椎動物與古人類研究所からは賈蘭坡教授、中国社会科学院からは考古研究所の安志敏教授と外事局の呂文忠通訳、三氏の来日が決定した。いうまでもなく、賈蘭坡教授は旧石器時代の指導的な研究者として、安志敏教授は新石器時代研究の代表者として、世界的によく知られている。

両教授は、一月一三日から二六日までの二週間、日本に滞在した。この間、東京と京都で、明治大学と朝日新聞社が主催し日本考古学協会と日本中国文化交流協会が後援する公開講演会「石器時代の中国」がひらかれた。賈蘭坡教授と安志敏教授とはそれぞれそのなかで、最新の研究成果にもとづく興味深い講演「東洋における人類の出現—中

国の旧石器時代―、「東洋における農耕の発生―中国の新石器時代―」をおこなった。

また、専門的な研究集會も二度ひらかれた。東京ではシンポジウム「中国の旧石器時代・中石器時代」が開催され、お茶の水女子大学の関野雄教授が司會をつとめた。この東京シンポジウムでは、①中国最古の石器文化とその時期、②中国旧石器時代における下部・中部・上部の分期、③中国上部旧石器時代文化の性格、④旧石器時代と細石器文化、等について論議がかわされた。これにたいして京都では、シンポジウム「中国の新石器時代・初期青銅器時代」がおこなわれた。京都大学の樋口隆康教授が司會をつとめた京都シンポジウムにおいては、①中国細石器文化と裴李崗文化、②仰韶文化の分期と年代、③中国青銅器文化の発生、④稲作農耕の出現と地域、等をめぐる討論がすすめられた。

賈蘭坡教授・安志敏教授と日本側の研究者とが直接ひびきをまじえた東京と京都のシンポジウムは、日本・中国間の研究交流を一層ふかめる格好の場であった。われわれは、中国石器時代の研究が、いまだどんな問題と直面し、それとどのようにとりくんでいるのかを、はだで感じることができた。とくに、石器研究に関連するいくつかの課題については、それをより實際的に知りうる材料が与えられた。すなわち、中国の旧石器時代から中石器時代と新石器時代にわたる、石器等遺物の複製標本が提供されたのである。

複製標本は、いずれも中国石器時代の編年に引用されることの多い、きわめて重要な資料ばかりであった。そして、明治大学に寄贈された。これによってわれわれは、中国石器研究上の具体的そして個別的な問題について、それを直かに検討する機会を、将来にわたるもちつづけることができるわけである。そうした意味で、この複製標本は日本と中国とのあいだの石器研究の交流にとって、実資料という永固な掛け橋となるにちがいない。

二 複製標本からみた中国の石器時代

このたび中国科学院古脊椎動物與古人類研究所と中国社会科学院考古研究所から寄贈された複製標本には、石器のほか骨器と裝飾品さらに人類化石がふくまれており、その数は全部で一五〇点にのぼる。複製標本のうち一四〇点が石器で、その内訳は、西侯度遺跡13、元謀遺跡3、許家窯遺跡34、峙峪遺跡30、小南海遺跡20、虎頭梁遺跡4、

附表：複製標本一覽表

遺跡名・資料番号	資料名	文献	対照図版	遺跡名・資料番号	資料名	文献	対照図版
許家窯(49)	石器	⑤	図一〇-6	西侯度(75)	石器	⑪	図IV-11
(50)	"	"	"一〇-2	(76)	"	"	" IV-10
(51)	"	"	写陸-9	(77)	"	"	" IV-12
(52)	"	"	図一一-1	(78)	"	"	" IV-9
(53)	"	"	写陸-5	(79)	"	"	" IV-7
(54)	"	"	図一〇-3	(80)	"	"	" IV-8
(55)	"	"	"一〇-4	(81)	"	"	" IV-4下
(56)	"	"	"一一-8	(82)	"	"	" IV-3
(57)	"	"	"一〇-1	(83)	"	"	" IV-5
(58)	"	"	"一〇-5	(84)	"	"	" IV-1 B
(59)	"	"	"八-8	(85)	"	"	写XVIII-2
(60)	"	"	写肆-10	(86)	"	"	図IV-1 C
(61)	"	"	図八-6	(87)	"	"	" IV-6
(62)	"	"	写肆-9	元 謀(70)	左門歯	⑬	写
(63)	"	"	図八-5	(71)	右門歯	"	"
(64)	"	"	"八-7	(72)	石器	"	"
(67)	頭頂骨	⑭		(73)	"	"	"
(68)	後頭骨	"	写II	(74)	"	"	"
(69-1)	上顎骨	"	" III-1	許家窯(31)	"	⑤	図九-1
(69-2)	"門歯	"	" III-2	(32)	"	"	"九-3
(69-3)	"犬歯	"	" III-3	(33)	"	"	"九-2
峙 峪(1)	石器	③	図四-3	(34)	"	"	写伍-9
(2)	"	"	"四-4	(35)	"	"	"伍-1
(3)	"	"		(36)	"	"	"伍-3
(4)	"	③	図四-7	(37)	"	"	"肆-1
(5)	"	"	"四-5	(38)	"	"	図一一-5
(6)	"	"	"四-1	(39)	"	"	"一一-6
(7)	"	"		(40)	"	"	写肆-5
(8)	"	"		(41)	"	"	図八-4
(9)	"	③	写式-4	(42)	"	"	写肆-6
(10)	"	"	"式-1	(43)	"	"	図八-3
(11)	"	"	"式-18	(44)	"	"	"八-10
(12)	"	"	"壹-5	(45)	"	"	"八-12
(13)	"	⑬	写	(46)	"	"	"八-14
(14)	"	③	図四-11	(47)	"	"	"八-11
(15)	"	"	写式-17	(48)	"	"	"八-13

遺跡名・ 資料番号	資料名	文献	対照図版	遺跡名・ 資料番号	資料名	文献	対照図版
虎頭梁(2)	石器	⑧	図一一-12	峙峪(16)	石器	③	図四-13
(3)	"			(17)	"		
(4)	"			(18)	"	③	写式-11
海拉爾(1)	"	⑧	図三-2	(19)	"		
松山(2)	"	"	"三-5	(20)	"	⑬	写
(3)	"	"	"三-6	(21)	"	"	"
(4)	"	"	"三-7	(22)	"	"	"
(5)	"	"	"四-1	(23)	"	③	写志-4
(6)	"	"	"五-11	(24)	"	"	"志-16
(7)	"	"	"五-13	(25)	"		
(8)	"	"	"五-17	(26)	"		
(9)	"	"	"五-26	(27)	"		
(10)	"	"	"五-31	(28)	"		
(11)	"	"	"五-34	(29)	"	③	図五-2
(12)	"	"	"七-6	(30)	"	"	"五-3
(13)	"	"	"七-7	(88)	裝飾品	"	"五-4
(14)	"	"	"七-11	(65)	後頭骨		
(15)	"	"	"七-15	(66)	骨器		
(16)	"	"	"九-11	小南海(1)	石器	②	図三-5
沙苑(1)	"	"	"——9	(2)	"	"	"三-6
(2)	"			(3)	"	"	"三-10
(3)	"	①	図二-2	(4)	"	"	"三-11
(4)	"	"	"二-3	(5)	"	"	"六-1
(5)	"	"	"二-30	(6)	"	"	"六-3
(6)	"	"	"三-8	(7)	"	"	"六-5
(7)	"	"	"三-14	(8)	"	"	"六-7
(8)	"			(9)	"	"	"六-8
(9)	"			(10)	"	"	"六-9
(10)	"			(11)	"	"	"七-1
申扎· 双湖(1)	"	⑫	図四-2	(12)	"	"	"七-2
(2)	"	"	"四-3	(13)	"	"	"七-5
(3)	"	"	"四-4	(14)	"	"	"七-9
(4)	"	"	"四-12	(15)	"	"	"九-10
(5)	"	"	"四-13	(16)	"	"	"—○-1
(6)	"	"	"四-16	(17)	"	"	"—○-4
(7)	"	"	"五-8	(18)	"	"	"—○-10
(8)	"	"	"五-10	(19)	"	"	"——1
(9)	"	"	"五-15	(20)	"	"	"——2
(10)	"	"	"五-17	虎頭梁(1)	"	⑧	"——11

沙苑遺跡10、海拉爾松山遺跡16、それに申扎・双湖遺跡10である。骨器と装飾品は峙峪遺跡出土例で各一点。また、人類化石には、元謀人2、許家窯人3（5）、峙峪遺跡人1の、計八件がある。そして、西侯度・元謀・許家窯・峙峪各遺跡の石器・骨器・装飾品・人類化石あわせて九〇点が中国科学院古脊椎動物與古人類研究所からの、小南海・虎頭梁・沙苑・海拉爾松山・申扎・双湖各遺跡の石器あわせて六〇点が中国社会科学院考古研究所からの、それぞれ寄贈品である。以下に、これら複製標本の内容について、その概略を示しておきたい（付表参照）。なお、寄贈品の点数は資料名の傍に（ ）で併記することとする。

さて、中国の石器時代は旧石器時代・中石器時代・新石器時代の三つに、旧石器時代は初期・中期・晩期の三期に、それぞれ区分される。これを地質年代からいうと、旧石器時代初期は早更新世晩期と中更新世に、旧石器時代中期は晚更新世早期に、旧石器時代晩期は晚更新世後期に、そして、中石器時代と新石器時代とが全新世にあたる。また、人類進化の四つの段階をとうしてみると、旧石器時代初期は第三の段階すなわち原人（猿人）の段階に、旧石器時代中期・晩期が第四の段階すなわち旧人・新人（古人・智人）の段階に相当する⑩。

人類化石

元謀人⑩ 一九六五年、雲南省元謀県において、原人の段階では最も古い人類化石がみつかった。化石は歯牙のみで、左右の上顎内側門歯が一本づつであった。元謀人の年代は、地質年代の早更新世晩期に属し、古地磁気法によって今から約一七〇万年前と測定されている。

許家窯人⑩ 山西省陽高県の許家窯遺跡から発見された人類化石は、歯牙を残している上顎骨⁽¹⁾、左上顎第2臼歯1、頭頂骨⁽¹⁾、後頭骨⁽¹⁾あわせて九件と報告されている。原人から旧人への過渡的な形質をそなえているとされる許家窯人の年代は、地質年代の中更新世にあたる。

峙峪遺跡人⑩ 山西省朔県の峙峪遺跡からは、新人の化石・後頭骨⁽¹⁾一件が発見されている。この峙峪遺跡の年代は、地質年代の晚更新世後期に属し、放射性炭素によって今から28,945±1,370年前と測定されている。

石器・骨器・装飾品

西侯度遺跡⑩ 中国における最も古い旧石器時代の遺跡である山西省芮城県・西侯度遺跡からは、三二点の石器が

発見されている。石器の組み合わせは「石核⁽³⁾・石片⁽²⁾・刮削器⁽²⁾・砍斫器⁽⁵⁾・三稜大尖状器⁽¹⁾」であった。西侯度遺跡の年代は、地質年代の早更新世晚期に相当していて、古地磁気法により今から約一八〇万年前と測定された。

元謀遺跡⁽⁹⁾ 元謀人の歯牙化石が包含されていたと同じ地層から、数点の石器がみつかった。石器には「石核⁽³⁾・石片⁽²⁾・刮削器⁽³⁾・尖状器⁽³⁾」等がある。

許家窯遺跡^{(6)・(9)} 一九七四年と一九七六年におこなわれた調査が報告されている。一九七四年の調査報告には、石器三八九点と骨器が示されている。石器の組み合わせには、「石核⁽³⁾・石片⁽²⁾・刮削器⁽²²⁾・尖状器⁽⁸⁾・円頭刮削器⁽¹⁾・尖状器⁽¹⁾・雕刻器⁽²⁾・石鑽⁽¹⁾・球形石⁽¹⁾・小型砍斫器⁽¹⁾」がある。なお、人類化石は一九七六年の調査において、石器一万数千点とともに発見されたものである。この許家窯遺跡の年代については、はじめ今から約六万年ないし三万年前と推測されていたが、後に許家窯人の発見によって今から約一〇万年前と訂正されるにいたった。

峙峪遺跡⁽⁹⁾ 峙峪遺跡からは石器が一万五千点以上出土しているが、整理のすんだ八一八点が骨器⁽¹⁾・裝飾品⁽¹⁾とともに報告されている。石器には「石核⁽²⁾・石片⁽⁵⁾・小型砍斫器⁽¹⁾・尖状器⁽¹¹⁾・刮削器⁽⁸⁾・雕刻器⁽²⁾・扇形石核石器⁽¹⁾・斧形小石刀⁽¹⁾・石鏃⁽¹⁾」という組み合わせがみられるという。

小南海遺跡⁽⁹⁾ 河南省安陽県の小南海洞穴から発掘された石器は七千余点にのぼり、他に裝飾品も検出されている。石器群は『礫石石器』四〇一点と、『石片』六五〇〇点をふくむ『石片石器』六六一三点とに分けて報告されている。『礫石石器』には「石核⁽⁴⁾・石片⁽⁴⁾・尖状器⁽⁴⁾・刮削器⁽⁶⁾」がある。小南海遺跡の年代は、放射性炭素によって、今から13,075±220年前と測定されている。

虎頭梁遺跡⁽⁹⁾ 河北省陽原県の虎頭梁遺跡は九個所の地点をふくんでいるが、出土した石器と裝飾品はまとめて報告されている。「石片」約四万点と「石葉」約三〇〇〇点のほかに六四三点の石器がある。それらは「盤状石核或龜背状石核⁽¹⁾・両極石核⁽²⁾・楔状石核⁽²⁾・柱状石核⁽²⁾・砍斫器⁽¹⁾・尖状器⁽¹⁾・円頭刮削器⁽¹⁾・雕刻器⁽¹⁾・辺刃刮削器⁽¹⁾」である。虎頭梁遺跡の年代については知りえないが、よく引き合いにだされる山西省沁水県・下川遺跡の年代は放射性炭素によって測定されている。それによると、最も新しいところで今から14,450±900年前そして最も古いところでは今から34,250±3,500年前とされ、今から約二万年前前後の年代が多く測定されているらしい。

沙苑遺跡⑥ 陝西省大荔県の沙苑遺跡には、一五個所にわたる遺物の散布地がふくまれている。表面採集によってえられた遺物群は、石器と装飾品をあわせて、五一九点である。このうち五一六点の石器は一括されて、『細石器』四三六点と『石片石器』七八点そして『磨製石器』二点とに分けて報告されている。『細石器』には「石核・石葉・小石片・尖状器・鏃・刮削器」があり、『石片石器』には「石片・尖状器・刮削器」がある。また、『磨製石器』には「鏃」があるが混入という。いわゆる沙苑文化は、中石器時代の代表的な文化として理解されている。

海拉爾松山遺跡⑥ 1号地点から16号地点までの一六個所の遺物散布地をふくむ海拉爾松山遺跡は、内蒙古自治区の北部にある。採集された遺物群は、石器と土器片をあわせて、七七七点である。石器六七五点は16号地点をのぞく一五個所からの、土器片一〇二点は14・15・16号地点の三個所からの、それぞれ採集品である。石器はまとめられ、『細石器』二八五点と『石片石器』三八四点そして『石核石器』六点に分けられている。『細石器』には「細石核・細石葉・細石核石片」があり、『石片石器』には「石片・刮削器・雕刻器・矛・鏃」がある。また、『石核石器』には「砍砸器・斧形器・船底形器」がある。この海拉爾松山遺跡の石器群は土器を伴わないとされ、その年代は、中石器時代の「細石器文化」に属し、今から約八、九千年前と考えられている。

申扎・双湖遺跡⑥ チベット自治区にあって、二三地点にわたる双湖遺跡と四地点からなる申扎遺跡で採集されたのは、共伴がみとめられない土器片等をのぞいた、一五六点の石器である。石器は一括されて、『細石器』一四一点と『石片石器』一五点とに区分されている。『細石器』には「細石核・細石核石片・石葉・石片」があり、『石片石器』には「刮削器」がある。申扎・双湖遺跡の年代については、『石片石器』が旧石器時代に属し、『細石器』が中石器時代あるいは新石器時代に属するもの、とそれぞれ考えられている。

以上が、このたびの寄贈品の概略である。なお、明治大学には、さきに中国科学院から寄贈された、周口店第1地点・周口店第13地点⁽¹⁾・周口店第15地点⁽³⁾・丁村各遺跡の、石器の複製標本がある。

さて、中国の石器時代にあって、西侯度、元謀、許家窯、峙峪、小南海、虎頭梁、沙苑、海拉爾松山、申扎・双湖それに周口店第1地点、周口店第15地点、丁村などの各遺跡は、どのような時代的背景と文化的なつながりをもっているのだろうか。

中国大陸からは、旧石器時代の人類と文化の発展過程を示す重要な遺跡いわば示準的な遺跡が、これまでに約九〇個所発見されている。そして、元謀人にはじまる華南の旧石器時代の文化と、西侯度遺跡にはじまる華北の旧石器時代の文化とは、それぞれ異なった性格をそなえているようである。

賈蘭坡教授は、その華北の旧石器時代文化の発展に、少くとも二つの系統があると考えている^⑧。それは、「匱河—丁村系」（大石片砍砸器—三稜大尖状器伝統）と「周口店第1地点（北京人遺址）—峙峪系」略して「第1地点—峙峪系」（船頭状削刮器—雕刻器伝統）と呼ばれている。前者の系統には藍田・匱河・丁村・鵝毛口などの遺跡と文化があり、後者の系統には周口店第1地点・周口店第15地点・許家窯・峙峪・小南海などの遺跡と文化がふくまれる。西侯度遺跡の文化には、両系統がさかのぼることができる、最も古い位置が与えられているようである。

ところで、「第1地点—峙峪系」の基本的な特徴は、各石器群に細小の石器が大量に存在する点にあるとされる。それらには、不規則な小さい剝片から製作された、広い意味での、「細石器」であるという、積極的な意義づけがおこなわれている。そして、「細石器」技術の萌芽と、初現的な形態をもつ「細石器文化」的な石器の組み合わせとが、この系統のなかにもとめられるという。すなわち、「第1地点—峙峪系」は、中石器時代と新石器時代の「細石器文化」へと発展するものとされているのである。

さらに、そうした系列に属している古い遺跡が華北に集中していることから、中国の「細石器」は華北にはじまるとして、賈蘭坡教授の考えは、なおすめられていく。つまり、「第1地点—峙峪系」に起源し中国から東アジア・北アメリカにひろがる「華北細石器系統」と、地中海の周辺に起源する「地中海細石器系統」という二大系統のもとで世界の「細石器」を理解していくのである^⑨。

安志敏教授も、「幾何形細石器」と「細石葉細石器」という「細石器」の世界的な二つの系統うち、後者の華北起源説を論証している^⑩。まず、この「細石器」が、中国をこえて広い範囲に分布し、旧石器時代晩期から中石器時代と新石器時代さらに歴史時代にわたる様々な継続期間をもち、またいくつかの文化系統に属していることは、今や明白であるとする。したがって、この「細石器」を包括して「細石器文化」と呼ぶことは不適當であって、その場合は「細石器文化」にかえて、「細石器工芸伝統」（略称「細石器伝統」）という用語の使用を提案している。

華北の旧石器時代晩期から中石器時代に形成された「細石器伝統」は、最初、黄河流域に広まりながら、異った支系にわかれて発展したと考えられている。その一つの支系は、いわゆる「細石器文化」で漁撈・牧畜を主とし、中国の東北・内蒙古・新疆一带さらにとおくアジア北西部・アメリカ西北部にまで分布する。また一つの支系は、農耕を主とする新石器文化で、黄河流域に継続して発展する。いま一つの支系は、生業や文化様相に多様性をもつが同一の「細石器伝統」にはじまるとみられるもので、中国の西南から華南一帯にかけて分布するとされる。

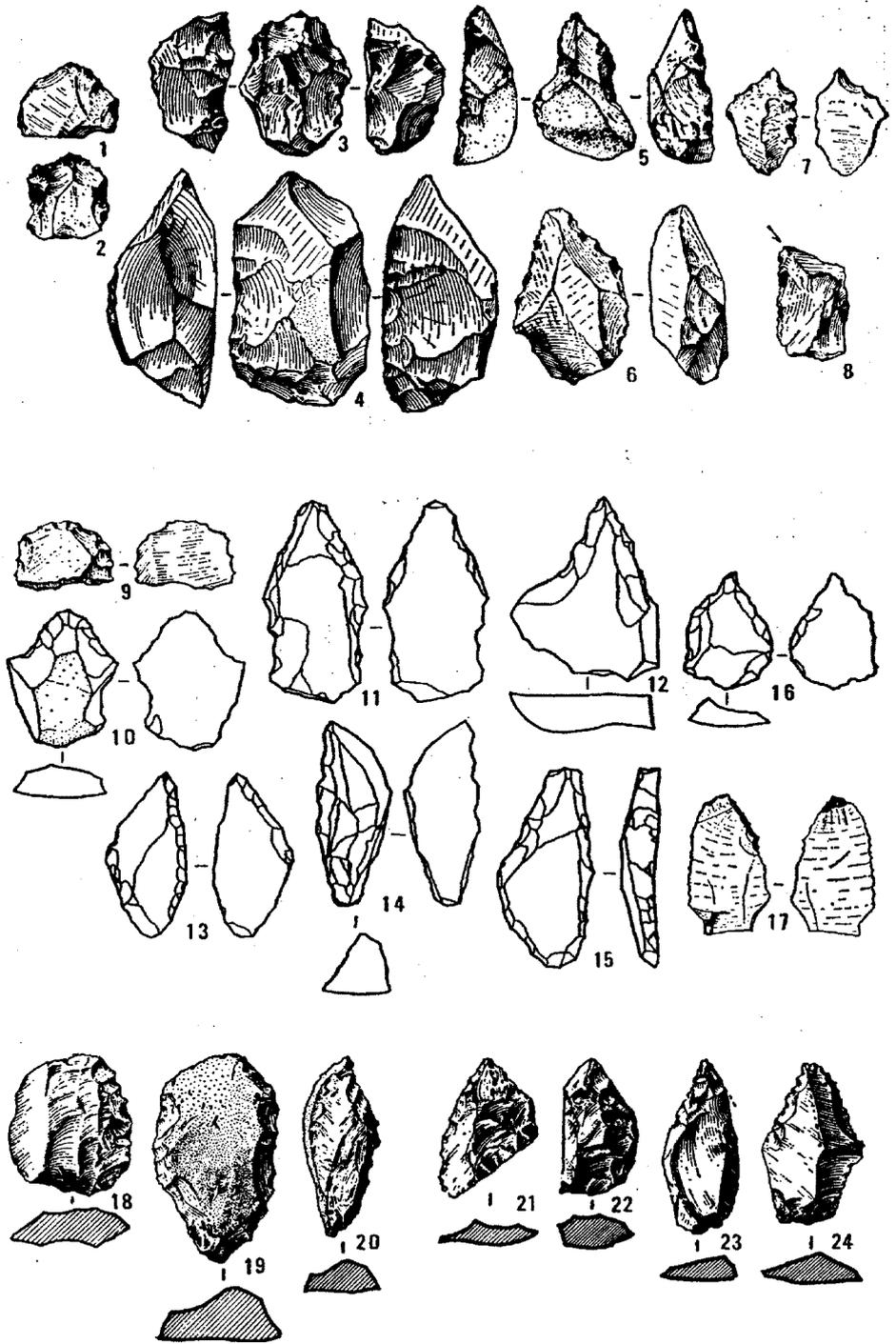
すなわち、華北の旧石器時代が進展していく過程に、初期からの石器が小形化する傾向があつて、晩期には峙峪・小南海遺跡など「細石器」の雛型が生まれ、晩期末葉にいたつて下川・虎頭梁遺跡など典型的な「細石器」があらわれるという、「細石器」出現の経緯があつてけられていたのである。また、沙苑遺跡は、黄河の流域にあつて、土器を伴わない典型的な「細石器」をもつもので、農耕発生以前の中石器時代に位置すると考えられている。

なお、安志敏教授はかつて「玄石器」と呼ばれた「細石器」について、嚴格に言えば「細石核」・「細石葉」そして「細石葉」が加工された石器に限定されるが、習慣上、それに共伴する「刮削器・尖状器・雕刻器・鑽・鏃」等の小形の石器もまた「細石器」と総称されていることにふれている。

三 複製標本の観察とその日本との関係

許家窯・峙峪・小南海の各遺跡は「細石器」的な石器の組み合わせをもつ遺跡とされ、虎頭梁・沙苑・海拉爾松山・申扎・双湖の各遺跡は細石核をもっている。そこで、いま複製標本をとうして、許家窯・峙峪・小南海遺跡の石器の組み合わせと、虎頭梁・沙苑・海拉爾松山・申扎・双湖遺跡の細石核とを、実際に観察してみたいと思う（第1図・第2図・注）。

許家窯遺跡においてすぐ気がつくことは相対的に厚手の石器と比較的薄手の石器とが、相応して存在することではないだろうか。厚手の石器には、きわめて鈍い剝離角をもった、大きな打面が残されている例がある。これにたいして比較的薄手の石器には、より直角にちかい剝離角をもち、より小さい打面がみられる場合が多い。剝片剝離技術上の特徴を示しているようである。



第 1 圖 1~8: 許家窯遺跡 9~17: 峙峪遺跡 18~24: 小南海遺跡 (縮尺不同)

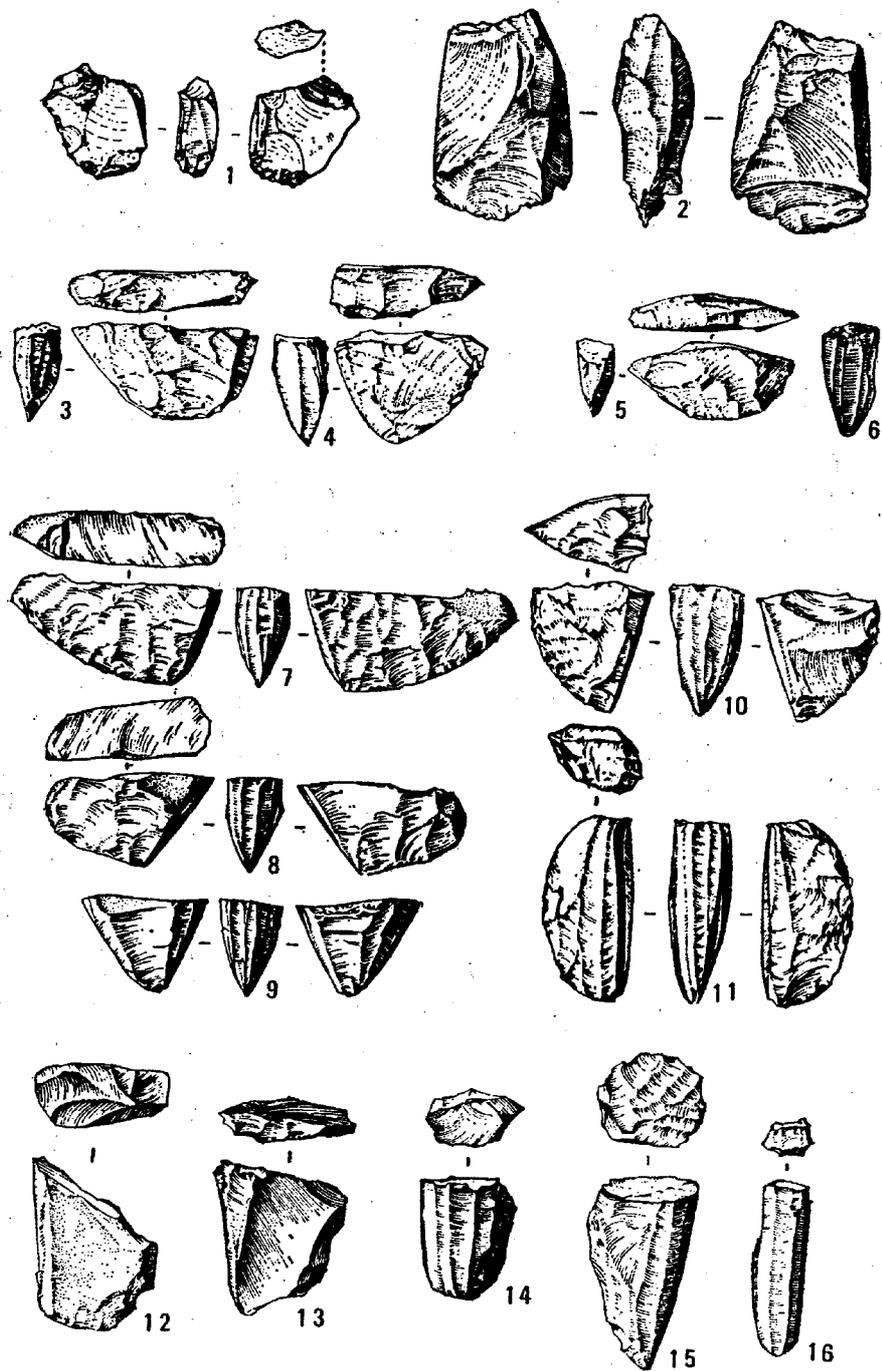
相対的に厚手の石器は、あるいは小礫を応分に打ち割ったかのような素材の存在さえも予測され、粗らく大きな剝離面が基本となった調整加工をうけている。そのうえに、細かい調整が加えられている。鋸齒剝離にちかい状態である。一方、比較的薄手の石器に施されている調整加工は、より一定し均一の状態の剝離面によっている。相対的に厚手の石器は「刮削器」と「尖状器」に目立ち、比較的薄手の石器は「刮削器」と「尖状器」の一部そして「雕刻器」と「石鑽」に代表例がある。

こうした許家窯遺跡の石器にあって、「尖状器」の形態をとりあげてみたい。相対的に厚手のものと比較的薄手のものの二者があることはすでにみたとおりであるが、前者の方が多い。また調整加工には、より全体の形状をととのえているとみられる在り方と、むしろ尖頭部の作り出しに力点がおかれているような在り方の、やはり二者がある。ともに、幅に倍する長さをもった細身の石器は少なく、その形状は幅広となっている。

つぎに、峙峪遺跡と小南海遺跡をみてみよう。両遺跡の石器からは、許家窯遺跡の石器とはちがって、全体的に同じような厚さをもっているという印象をうける。かなりの石器の表面には、裏面と一定の關係をもちながら連続するような、剝片の剝離面が観察される。それを、横長剝片や縦長剝片といった観点からとらえることは、必ずしも不可能ではない。とくに小南海遺跡において、より明瞭である。

両遺跡の調整加工の状態は、「刮削器」や「尖状器」等をとうして、大きな異なりはみとめられない。「尖状器」をみてみると、基本的には、許家窯遺跡の形態をうけついでている。その反面、調整加工の在り方は、より全体の形状をととのえている例が特徴であり、いわゆる周辺加工の石器にちかい。また、その形状は、幅に倍する長さをもった、細身の石器が目につく。そして、この「尖状器」には、あたかもナイフ形石器をおもわせるような石器が存在しているのである（第1図13、15・21）。

以上、許家窯・峙峪・小南海の三遺跡は、「刮削器」つまり搔器・削器と「尖状器」いわば尖頭形石器を中心とする石器の組み合わせをもつことで、互いにつながりをもっている。わけでも、峙峪遺跡と小南海遺跡とのあいだのつよい結びつきは、複製標本からも直かに観察することができた。この密接な關係は、両遺跡の石核についてもいえる（第2図1・2）。すなわち、両遺跡の石核には、安志敏教授によって、ともに、細石核における「船底形石核」の前身



第 2 图 1: 峙峪遗迹 2: 小南海遗迹 3, 4: 虎头梁遗迹 5, 6: 沙苑遗迹
7~11: 海拉尔松山遗迹 12~16: 申扎·双湖遗迹 (缩尺不同)

がみられると指摘されているのである⑥。

そこで、目を細石核へと転じていこう。虎頭梁・沙苑・海拉爾松山・申扎・双湖の各遺跡における細刃器の製作技術について、いま数点の細石核を観察して、その特徴をとらえることはむずかしい。とはいえ、海拉爾松山遺跡と申扎・双湖遺跡の細石核については、それぞれに異なる技法的な内容を知ることができる。

海拉爾松山遺跡の細石核からは、典型的な石核用両面調整素材の存在がうかがえる(第2図7、9)。その石核用の両面調整素材を断ち割るようにして、石核原形がととのえられている。断ち割りは、細刃器の剝離作業が開始される方向からおこなわれていて、平坦な打面を作り出している。そして、この打面からの形状調整がみられる。しかし、打面自体への調整はみとめられない。つまりまったくの平坦打面であるが、擦痕や磨滅等の痕跡はとどめない。また、細刃器の剝離作業は、打面上、背中合わせの方向に転移しており、これが残核に形状差を与えている。ところで、これら海拉爾松山遺跡の細石核の、その打面が、はたして一気に作り出されたものなのか、あるいは数回の削片剝離によるものなのかは、よくわからない。同様に、打面再生の有無についても不明とせざるをえない。ただ、このような観点からみると、「矛」残片・「船底形器」と報告されている石器との関連に注目しておきたい⑥。

一方、申扎・双湖遺跡の細石核においては、その原素材に板状にちかい削片を用いていることがわかる(第2図12・13)。その原素材にたいして、削片の表裏からおぎない合うかたちの周辺調整を施しながら、石核用素材ないし石核原形がととのえられているようである。打面は、最初、原素材の裏面から連続した横打剝離によって作り出されており、正面からみて傾斜する。細刃器の剝離作業面は、石核の裏面側にまわりこんでいる。ただし、この打面に、細刃器の剝離作業を開始する方向から、さらに何らかの加工等があったのかどうか、不鮮明である。ところで、残核の打面を観察すると、互いに逆方向からの、新旧二つの横打剝離の形跡をよみとれそうな例がある。打面の再生だろうか。仮りにそうであるとしたら、そのとき、細刃器の剝離作業面も石核の逆の側面にまわりこみをかえたかもしれない。興味ぶかい。

このように、海拉爾松山遺跡と申扎・双湖遺跡とから観察される二つの細刃器の製作技法は、しかし、それぞれの遺跡において、その細石核の全体におよぶものでは決してない。逆にいえば、両遺跡には、また別の細刃器製作技法

の存在が予測されるわけでもある。実際、虎頭梁遺跡からは、「河套技術」と「虎頭梁技術」という、異った二つの細石器製作技法が抽出されている⑥。こうした技法相互の共存関係は、沙苑遺跡についてもいえそうである。ただ、虎頭梁・沙苑・海拉爾松山・申扎・双湖各遺跡における細石器製作技術が、いくつかの技法の共存なのか、われわれの知らない技法全体のその部分であるのかは、十分に検討しなければならぬ問題として残される。

さて、許家窯・峙峪・小南海遺跡にみられる特徴的な石器の組み合わせ、そして虎頭梁・沙苑・海拉爾松山・申扎・双湖遺跡の細石器がもつ細石器製作の技術的な性格は、日本とどのような関係にあるのだろうか。複製標本の観察結果と日本の石器文化とを比較検討して、おわりにしたいと思う。

日本の先土器時代は、石器時代の区分にしたがえば、下部旧石器時代と中石器時代とに相当する。先土器時代には、時間の推移とともに交替するような、指準的な石器が存在している。ナイフ形石器・槍先形尖頭器・細石器細石器である。そこで、先土器時代を、そうした石器をもって区分し、古い方から順にナイフ形石器文化・尖頭器文化・細石器文化と呼ぶことも多い。かつて日本列島が大陸と結ばれていたとき、北や南には陸つづきの門戸があった。そこで先土器時代と中国の石器時代とを比較するまえに、ナイフ形石器・尖頭器・細石器の分布をみておきたい。ナイフ形石器は北海道地方にのみ未発見であり、尖頭器と細石器は日本全域から発見されている。ナイフ形石器文化は、九州地方と本州地方の東北部・中央部・西南部というように、はっきりとした地域性をもっている。その本州地方の中央部とほぼかさなるようなひろがり、つづく尖頭器文化の主要な地域でもあった。そして、北海道地方と九州地方とは、日本における細石器文化の核地域ともいえる。ナイフ形石器文化が形成していた地域性は、北海道地方と九州地方においてははいちはやく、そしてやがて細石器文化のひろがりとともに日本列島を東西に分かつようなかたちに組みかえられていく。

中国旧石器時代中期の許家窯遺跡と晩期の峙峪・小南海遺跡とは、同一伝統下に共通する特徴的な石器の組み合わせがある。それとさきさきの観察からも知ることができた。こうした伝統的な石器の組み合わせを、ナイフ形石器の文化にみることもできるだろうか。許家窯遺跡の年代は今から約一〇万年前と推定され、峙峪遺跡は約二万九千年前、小南海遺跡は約一万三千年前という測定値がえられている。すなわち、この伝統的な石器の組み合わせ

が、ナイフ形石器文化と併行したことは確かであろう。

ナイフ形石器文化には、本州地方の中央部において、五つの時期がみとめられる⁽²⁾。それぞれをよく知られている遺跡をもって示すと、古い方から順に、岩宿Ⅰ・茂呂・岩宿Ⅱ・砂川・月見野の時期となる^{(16)・(17)・(18)・(19)}。月見野の時期には、尖頭器が共伴する。そして、岩宿Ⅱの時期は、他の時期にくらべて、かなり豊富な石器の組み合わせを特徴的にもっている。すなわち、ナイフ形石器に尖頭形石器・搔器・削器・礫器等が伴なう。ナイフ形石器には、横長の剥片を多用してそれを切断するような加工の切出形石器と、縦長の剥片を用いて打面周辺部に調整を加えた基部加工の石器とがある。尖頭形石器には、比較的薄手で周辺加工にちかい石器、三稜形の断面をもち相対的に厚手の石器、尖頭部に加工を集中した石器等がある。搔器は短かく、部厚い。そして、石器の調整加工の状態には、通常の剥離のほか、鋸歯剥離が目立つ。その鋸歯剥離によつた石核状の石器もみとめられる。

このように、いまのところナイフ形石器文化のなかで、許家窯・峙峪・小南海遺跡の石器の組み合わせと比較するのは、岩宿Ⅱ期の石器群といえそうである。実際、互いに共通あるいは類似する石器の個々を、指摘し合うことも不可能ではない。しかしながら、許家窯・峙峪・小南海遺跡のもつ伝統的な石器の組み合わせには、安定した形態としてのナイフ形石器は存在しない。また、岩宿Ⅱ期の石器群にみる石器の組み合わせは、全時期にわたる在り方ではなくこの時期の特徴である。直接的には大きなへだたりがある。ただし、岩宿Ⅱ期の石器群が、この時期にかぎられるような石器の組み合わせをもっていることは、別の意味で注意されてもよいかもしれない。それはまず、ナイフ形石器文化が地域性をもつなかで、そのどの地域にもこの岩宿Ⅱ期の石器群が存在するという分布の一様性である。そして、それは、九州地方において、最も古い細石器文化と共伴するという時間的・空間的な位置である⁽²⁰⁾。周辺の文化と接触した時期と地域、そしてその衝撃の間接的な波及を暗示する現象とみることができないだろうか。

さて、その細石器文化についてはどうだろうか。ところで、日本において、細石核の分類とその呼称は、必ずしも統一的におこなわれ、体系的に用いられているとはいえない。中国においてはどうか。いくつかの分類の基準と、それにもとづく用語があるようである。賈蘭坡教授は、細石核に相当する石器を、「楔形石核・扇形石核（船形石核）」と「棱柱状石核・錐形石核（鉛筆頭形石核）」⁽²¹⁾というかたちでまとめている⁽²²⁾。また安志敏教授は、賈教授の二者に

対応すると思われる、「扁体石核」と「円体石核」とに分けている⑧。「扁体石核」には「船底形石核」・「扁錐形石核」・「楔形石核」がふくまれ、「円体石核」は「円柱形石核」・「円錐形石核」がその代表とされる。日本の細石核は、細刃器製作の技術的な相違のもとに区分すると、三つに分けられる。湧別技法・峠下技法・西海技法等による調整形細石核、ホロカ技法による船底形細石核、矢出川技法による稜柱形細石核の三者である⑨。このような技法的観点から、中国の細石核をみてみよう。申扎・双湖遺跡の残核から観察される細刃器製作技術の特徴は、いま日本に比較できる技法はない。あるいは、峠下技法のなごれのなかにあるのだろうか。これにたいして海拉爾松山遺跡の技術は、まさに湧別技法的な内容といえる。さらに、虎頭梁遺跡に知られる「河套技術」と「虎頭梁技術」は、それぞれ湧別技法と西海技法とに対比されている⑩。このように、日本と中国には、共通する技術が存在することはあきらかである。そして、虎頭梁遺跡の二つの技法は、海拉爾松山・沙苑などの遺跡でも観察できそうである。日本では地域と時期を分かつ両者がいっしょにある点に関心が引かれる。文化の系統的なつながりも十分に考慮されよう。

そこで、細石核と石器の組み合わせとの関係をおってみたい。安志敏教授は、「扁体石核」と「円体石核」とは共存するが時間差があって、「扁体石核」の方が古いとしている⑪。そして、旧石器時代から中石器時代にかけては、虎頭梁遺跡や海拉爾松山遺跡のように、「扁体石核」が主であり、新石器時代には「円体石核」が主となると述べている。その虎頭梁遺跡と海拉爾松山遺跡には、峠・小南海遺跡がもつ石器の伝統的な組み合わせははっきりしない。石器には、尖頭器・彫器・搔器・削器などの一連の新らしい組み合わせが姿をみせている。日本では、調整形・船底形・稜柱形の三つの細石核において、それらが共存する在り方は細石器文化の前半期に特徴的で、その後半期にはそれぞれ個別的に存在する傾向がよい。そのような細石器文化において、最も古いと考えられる石器群は、北海道地方の置戸安住遺跡と九州地方の船野遺跡とに代表されるものと考えている⑫。

置戸安住遺跡においては、調整形細石核（湧別技法）に船底形細石核（ホロカ技法）と稜柱形細石核（矢出川技法）が伴う⑬。石器群の組み合わせには、尖頭器・彫器・船底形石器・搔器・削器・石斧等がみられる。船野遺跡にあっては、船底形細石核（ホロカ技法）と稜柱形細石核（矢出川技法）が共存する⑭。石器群の組み合わせは、すなわちナイフ形石器文化・岩宿Ⅱ期の組み合わせであり、ナイフ形石器・尖頭形石器・搔器・削器・礫器等がある。

このように、置戸安住遺跡の石器の組み合わせは、虎頭梁遺跡等に類似しているといえようか。さて、一方の船野遺跡とのつながりが考えられる遺跡を中国にもとめられるだろうか。下川遺跡に注意したい⑩。下川遺跡についてはしかし、いまそのはつきりとした共時関係にある石器を、具体的に知ることはできない。放射性炭素による測定年代にも、二万年間ほどの幅がある。とはいえ、石器の組み合わせには興味ぶかいものがある。すなわちそれは、尖頭形石器など伝統的により古い部分と、虎頭梁遺跡的な部分とを、それぞれ合わせたかのようなものである。また、細石核をみると稜柱形が多数を占めており、船底形も存在している⑪。そして、ナイフ形石器もあるらしい。つながりをもとめられるかもしれない。

四 おわりに

先土器時代の石器群とその文化は、日本をとりまく地域の文化と接触していたと考えうるいくつかの側面をもっている。すでに研究史上、指摘されているところである。ここでは、複製標本をとうしてナイフ形石器文化の岩宿Ⅱ期に九州地方から本州地方へと間接的におよび、その直後の細石器文化では東西から列島をおおった、大陸からの影響を観察できるのではないかと考える。

今後、在来資料の再検討と新資料の蓄積とによって研究がすすめられていくなかで、日本と中国とのあいだのより細部にわたる石器時代のつながりは、一層はつきりとなるだろう。それは、東アジア一帯のそれぞれの地に、個性ゆたかな文化を発展させた、人類の足跡を知ることになるちがいない。

参考文献

- ① 安志敏・吳汝祚「陝西朝邑大荔沙苑地区的石器時代遺存」《考古學報》一九五七 第三期
- ② 安志敏「河南安陽小南海旧石器時代洞穴堆積的試掘」《考古學報》一九六五 第一期
- ③ 賈蘭坡・蓋培・尤玉柱「山西峙峪旧石器時代遺址發掘報告」《考古學報》一九七二 第一期
- ④ 賈蘭坡・尤玉柱「山西懷仁鷓毛口石器製造場遺址」《考古學報》一九七三 第二期
- ⑤ 賈蘭坡・衛奇「陽高許家窯旧石器時代文化遺址」《考古學報》一九七六 第二期

- ⑥ 蓋培・衛奇「虎頭梁旧石器時代晚期遺址的發現」(《古脊椎動物與古人類》第15卷第4期 一九七七)
- ⑦ 蓋培・史石「黄河の水は江戸に通じる」(《人民中国》一九七七一〇)
- ⑧ 安志敏「海拉爾の中石器遺存—兼論細石器の起源和伝統」(《考古学報》一九七八 第三期)
- ⑨ 王建・王向前・陳哲英「下川文化 山西下川遺址調查報告」(《考古学報》一九七八 第三期)
- ⑩ 賈蘭坡「中国細石器の特徴和它的伝統、起源與分布」(《古脊椎動物與古人類》第16卷第2期 一九七八)
- ⑪ 賈蘭坡・王建「西侯度 山西更新世早期古文化遺址」(一九七八 文物出版社)
- ⑫ 安志敏・尹沢生・李炳元「藏北申扎、双湖的旧石器和細石器」(《考古》一九七九 第六期)
- ⑬ 賈蘭坡「中国大陸における太古の住民」(一九七九 外文出版社)
- ⑭ 賈蘭坡・衛奇・李超榮「許家窯旧石器時代文化遺址 一九七六年發掘報告」(《古脊椎動物與古人類》第15卷第4期 一九七九)
- ⑮ 吳汝康「中国古人類学三十年(一九四九—一九七九)」(《古脊椎動物與古人類》第18卷第1期 一九八〇)
- ⑯ 杉原莊介「群馬県岩宿発見の石器文化」(《明治大学文学部研究報告》考古学第一冊 一九五六)
- ⑰ 杉原莊介・吉田格・芹沢長介「東京都茂呂における関東ローム層中の石器文化」(《駿台史学》第9号 一九五七)
- ⑱ 戸沢充則「北海道置戸安住遺跡の調査とその石器群」(《考古学集刊》第3卷第3号 一九六七)
- ⑲ 月見野遺跡群調査団「概報月見野遺跡群」(一九六九 明治大学考古学研究室)
- ⑳ 砂川遺跡調査団「砂川先土器時代遺跡—埼玉県所沢市砂川遺跡の第二次調査—」(一九七四 所沢市教育委員会)
- ㉑ 橘 昌信「宮崎県船野遺跡における細石器文化」(《考古学論叢》第3号 一九七五)
- ㉒ 安藤政雄「石器の形態と機能」(《日本考古学を学ぶ》第2卷 一九七九 有斐閣)
- ㉓ 安藤政雄「日本の細石器」(《駿台史学》第47号 一九七九)

注

第1図と第2図は、第1図・1をのぞき全て寄贈品である。実測図は文献①・②・③・⑤・⑧からの転載である。ただし、実測図のないものについては略図をもって示した。